

講演会「歴史遺産とまちづくり」

—住民参加による庭園の発掘・復元・移築・管理—

平成 27 年 5 月 30 日 (土)
京都造形芸術大学 芸術学部歴史遺産学科
教授 仲 隆裕 氏



本日は歴史遺産とまちづくりというタイトルでお話をさせていただきます。

西浦門前遺跡は、後鳥羽上皇の離宮の庭園跡の可能性が高まっている遺跡です。ここで立派な庭石と池、落差が小さいものの非常に品の良い滝の遺構が確認された訳ですが、保存が難しいので部分的に遺構を切り取り、資料館に移築できないかという交渉を町としてしているところです。そして移築プロジェクトは、プロに任せきりではなく、町民のみなさんと一緒にできないかと思っております。

それぞれの町には歴史があって、その町特有の文化というものがあるわけです。歴史まちづくりというのは、いろんな町でそれぞれの町の歴史をもう一度ひもといていって、それを伝える遺産にはどんなものがあるか、文化として残ってるものにどんなものがあるか、それぞれの町を歴史的なアイデンティティー・特徴をはっきりさせて、その魅力を伝えていこうというものです。

それでは、整備や移築の他地域での事例をご紹介します。

まず、宇治市の事例です。宇治橋は、大きな街道に架かる橋としては最古に近い記録が残っていて、宇治橋が架けられた大化二年の記録が、石碑に残っています。また平安時代からずっと現在まで継続している歴史的な街区も一つの個性です。この街区を中心に平等院や宇治上神社、県神社という風な歴史的な建造物、寺院寺社があります。このようによく知られた観光地で、宇治は賑わっていると他の人から見られるのですが、宇治も新興の住宅地が増えてきて、町の歴史にはあまり興味ない人が増えてきました。そういう中であって、宇治にはこんな歴史があると、お互いに町の歴史を語りながら新しい町を作っていく、そんな取り組みが行われています。全国でこういった歴史まちづくりが進められているわけです。

この島本町でも取り組みがされていると思いますが、この西浦門前遺跡、広瀬遺跡など、後鳥羽上皇、水無瀬離宮に関わる遺跡が確認されて、出土した緑釉陶器など、素晴らしい遺物を使って歴史をどう受け止め、どんな町を作っていくのか、そういう一つのきっかけに、この庭園移築がなると良いな、と期待しています。

次に、承久の乱によって隠岐に流された後鳥羽上皇のお世話をしたという伝承をもつ村上家というお宅について紹介します。村上家は、地元の海士町に建物を寄贈されました。そこで後鳥羽上皇あるいは村上家を偲ぶ文化施設を造ることになりまして、建物と庭園の調査と整備が行われました。村上家庭園の発掘調査は、島本町と深い後鳥羽上皇と関わりをもつ庭園整備ですので、その事例を見ていただこうと思います。

村上家は、昭和の初めに建て替えられておりますので、鎌倉時代や室町時代の建物の風情はない

のですが、木造の趣ある素晴らしい建物です。後鳥羽上皇を偲んでつくられた庭園がありますが、荒れているので、建物の改築修理とあわせて、庭園の復元を行うことになったわけです。まず、草刈りをして、地形の実測を行いました。最初にトレンチ調査といいまして、土を削って、下にどんな遺跡があるのか確認する仕事を行っています。このように埋蔵文化財の発掘調査の手法を使うと地下にどんな庭園が眠っているのかわかります。その後整備に入っていきます。一枚だけ古写真が残っていたのでそれを手がかりにして景石をどこに復元するか検討した結果、建物に一番近い所に据えられていたということがわかりました。こういう形で、発掘調査や資料調査の成果に基づいて復元整備が行われたのです。

次に、島本町でこれから行いたいと思っておりますような取り組みが行われた舞鶴市の事例です。江戸時代の大庄屋の上野家は大きな土地の所有者で、明治維新後、地元を出て国会議員になられました。近年、無住のまま置いておくには忍びないということで、舞鶴市に寄贈されました。地元では、この歴史遺産を核として地域の振興も進めたいということもあり、自分達の手でできることはやろうということで、建物の修復はプロに任せるが、庭園の整備をみんなでやろうよ、ということになりました。月に一、二回集まって二年ほどかかりましたけども、庭園の復元整備が行われたのです。過疎が進行してゆくなかで、ここは早くから山村留学や都会の人に田植えの体験をしてもらうという活動をしてきた村です。この建物を修理した後は地元の料理を楽しんでもらえるような施設にしようとの計画がたてられました。庭園の方はどうするかということで、村の人は樹木を剪定して草取りをして砂でもしいたら綺麗になるのでは、と思っておられたのですが、ここには池があったに違いないからと、私の提案でみんなで集まりまして発掘をしました。現在、この上野家を文化的な行事の中心地にしていこうと、講演会をやったり自然観察会をしたりなどいろいろなプログラムが組まれて活動されています。西浦門前遺跡でも、庭園が移築されたら、その後それを使ってどのようなプログラムを組み、活用できるのかについて考えていけたらよいと思います。

最後に、京都の中で平安時代の庭園がいくつか発掘されて現地保存されているものがあります。京都の二条城の東にあるホテル建設地から堀河院庭園の滝の石組が発掘され、ホテルの限られた範囲に滝の石組の一部が移築されました。もう一つは、堀川音楽高校が移転に伴い、その事前の発掘調査で立派な庭石がでたため、中庭に移築された事例です。

隠岐と舞鶴はその場所に残っていた庭園で荒れた状態にあるものを整備した、という事例ですが、堀河院庭園は移築ということです。今回ここで、取り組もうとしているのも別の場所で発見された遺跡の移築です。なるべく広い範囲の遺構を移築したいのですがそうも参りません。また、庭園ですから、地形が大切ですね。背後の山の形を見ると深い堀のような河が流れ、正面、東の方に大山崎が見えそのような雄大な風景の中にあつてこそ庭園らしくなる。この資料館の敷地内に移築が予定されていますが、このような環境のすばらしさがどれくらい継承できるだろうか、なかなか難しい。方角もそうですね。水は高いところから低いところに流れていきますから、上流の方に滝があつて、低い方に池を作りたい。といっても、ここはまっ平らな土地になるわけですね。どうして起伏をつくったらいいのだろうか。それからここは水が流れて池だったわけですが、水をためるのか。ためないのか。その後の維持管理をどうするのか。様々な問題があります。

これらをしっかり検討し、みなさんでよい移築保存になるよう、一緒に取り組んでいきましょう。どうもご静聴ありがとうございました。